浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

第316号
平成22年2月

電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

僅かばかり
儲かった
褒められた
幸せここにと
有頂天になり

したたか
損をした
中傷された
切なく苦しいと
怒り悲しみ
ふてくさる

間断なき
愛憎の風は
小さき心を
あそこここ
ふわり
ふわり舞い上げる

心は大きく
大きくどっしりと
動ずるなかれ

寒山拾得（上）

一度見たら生涯忘れることのできないほど印象深いものってありませんでしょうか。おそらく、次に掲げる図などはその代表格にあげられるものと思われます。

『寒山拾得図』伝顔輝作（14 世紀）

異様な風体とその笑みを含んだ眼差しは、何かしら見るものにメッセージを送ってきているようで、気になって眠れないほどではないにしろ、折に触れ、「いったいこの二人は何者？」という疑問が頭をもたげてきます。

だからでしょうか、あの森鴎外、芥川龍之介、井伏鱒二といった文豪も、『寒山拾得』という短編を残しています。ただ、これらの作品で、この二人の人物像が分かるかというと、やはり、そこはそう単純にはまいりません。順当な手段として、『寒山詩集』を紐解く必要がありそうです。

この詩集は異本が多く、概ね、寒山詩（三百余首）、拾得詩（五拾余首）、豊干詩（二首）と、この詩集を撰した閭丘胤の序文からなっています。そして、この序文に、詩集を撰するに至った経緯が記されています。史実云々の問題は別として、概要は次の通りです。

天台の丹丘（現在の浙江省）の官吏として赴任することになった閭丘胤、途中で突然、頭痛に悩まされることになる。易者や医者に治療させたが重くなるばかり。そこへ、たまたま豊干という禅師が天台の清国寺から訪ねてきて、治療を頼むと、浄水を頭に吹きかけ、たちどころに治してしまった。

閭丘が、これから赴任する天台に、師と仰ぐに足りる賢者がいるかと尋ねると、「見ようと思えば分からなくなり、分からなくなったと思うと見えるようになる。ものを見ようと思えば、まずその姿かたちを見てはならない。心の目で見るのだ。寒山は文殊菩薩で、国清寺に隠れ、拾得は普賢菩薩、その二人の姿は乞食のようであり、また風狂のようでもある。寺へ出入りしているが、国清寺の庫裡の厨房では使い走りをしたり、竈たきをしたりしている」と言い終わると豊干は立ち去った。

閭丘は任地に着き、早速に役人に命じて、寒山と拾得の所在を調べさせたところ、「県境より西七十里の所に巌があり、その巌に貧士が住み、たびたび国清寺に行っては庫裡で止宿してい

るのを古老が見た。また庫裡には、拾得という名の行者がいた」との報告であった。

それで国清寺に行き、豊干禅師、そして拾得と寒山の現況を尋ねると、僧の道翹が、「豊干禅師の院は経蔵の後にあるが、今は誰も住んでいない。時折一頭の虎が現れて吼えるだけだ。寒山と拾得の二人は現在厨房にいる」と言う。閭丘は、案内された豊干禅師の院に行って、部屋を開けて見たが、そこには虎の足跡が残るだけであった。豊干がここに居た頃は、米をついて大衆に供養し、夜には歌をうたって独り楽しんでいたという。次に厨房へ行くと、竈の前で二人の者が火にあたって大笑していた。閭丘が進み出て礼拝すると、二人は続けざまに閭丘を大声で怒鳴りつけ、また互いに手を取り合って呵呵大笑し、「豊干のおしゃべり。阿弥陀にさえわからぬに、われらを礼拝して何になる」とわめき立てた。僧たちは、驚いて駆け集まり、このような乞食どもに、何故礼拝などするのかと大いに不審がった。その隙に、寒山と拾得は手を取り合って、寺から出て行ってしまった。

『寒山拾得図』寒山寺所蔵拓本

閭丘は、あれ以来二人が寺に帰ってこぬというので、使者を立て巌へ供物を持って行かせたところ、ようやく寒山に会えた。閭丘らを見ると寒山は大声で「賊だ賊だ」と怒鳴りつけ、巌の穴にもぐり込み、「汝ら皆に言う。各々努力せよ」という声とともに姿が見えなくなった。拾得の所在もようとして知れない。

その後、道翹に寒山の行状を調べさせたところ、竹・木・石・壁などに詩を書きつけ、また村の人家の壁の上にも書き散らした文句など三百余首、加えて、拾得が土地堂の壁の上に書いた偈文などもあったので、取り集めて一巻とした。

以上、「自分は仏の教えに心を寄せていたので、幸いにも達道の人と巡り会うことができた」との感想で序を結んでいます。確かに、我々の身近に文殊や普賢がいたとしても、気づいていないだけかもしれません。鴎外の作品で、寺から出て行った二人を呆然と見送り、「道翹は真蒼な顔をして立ちすくんでいた」という最後の件は、道翹自身、迂闊だったことへの反省と事の重大さを知ったが故の表現でありましょう。

◎炬燵（こたつ）

これもまた禅寺の風習から生まれたことば。昔の禅寺はよっぽど寒かったものとみえる。古くは「火燵」（こたつ）と書かれるケースが多かったとか。

もちろん昔から、「置き炬燵」と「掘り炬燵」の両者が存在するのだが、禅寺で用いられていたのは前者と見られている。

しかしどうして炬燵なのか。一説では室町時代の文献に見える「火榻」のためではないかといわれている。これを中国語の発音ではかとう。それが音便でかたつ→こたつになったというのだ。

ところで、この炬燵がない時代、人々はどうやって冬の寒さの中で暖をとったのだろうか。山東京伝の『骨董集』（こっとう）には、平安朝時代の様子をうかがわせる一枚の絵がある。それによると、十二単（ひとえ）を着た女性が台座に腰を下ろし、裸足の足を二本、火鉢の上にかざしているではないか！　炬燵がない時代の婦人たちはかくも大胆であった。（『仏教のことば』早わかり事典）

雑記

▼寒山拾得（追記）

寒山・拾得・豊干の三隠士の生存年代は七世紀、初唐の頃といわれます。ただ、寒山の名は寒巌に隠棲していたことからついた名で、実名ではなく、拾得は豊干に拾われた捨て子であったから、あるいは、人物ではなく、『詩集』に漏れたものを「拾いとる」という意味に由来するとも言われ、その存在すら明らかではありません。編者閭丘胤（りょきゅういん）にしても、他の文献にその名はなく、これも謎であります。ただ事実は、詩が残っていることです。次回は、その詩のいくつかを検討いたします。

▼ご寄付

磬子（きんす）と磬子台（きんすだい）のご寄付を新たに次の方から賜りました。ありがとうございました。敬称略

◎土方　祥　（一万円）

▼立春

立春の日、門に「立春大吉」と書いた紙を貼る習慣が禅宗にあります。この文字は左右対称で、一年間災難にあわないというおまじないです。また、節分にイワシを焼いてその頭を柊（ひいらぎ）に刺して軒先に飾る習慣もあります。

◆邪気悪鬼豆で払いて

春よ来い　沐魚